

ふるさとの川整備事業の現状について

元企画調査部 副参事 加藤 真雄

1. はじめに

「ふるさとの川整備事業」は昭和62年度よりまちづくりと一体となった良好な水辺空間の形成を目的として、当初は「ふるさとの川モデル事業」として始まり、その後「せせらぎふれあいモデル事業」、「都市清流復活総合モデル事業」などの他のモデル事業を統合し、平成8年度より「ふるさとの川整備事業」と名称を変更して直轄河川も対象にして再スタートし、現在までの10年以上が経過する間に日本全国で指定185河川（直轄14河川）、認定170河川（直轄10河川）（平成10年10月現在）を数えるに至っている。

ここでは、ふるさとの川整備事業を実施している河川について、今後の整備計画の策定、事業の円滑な推進に資するために平成8年8月に建設省河川局治水課、河川環境課及び各都道府県の協力を得て行なったアンケート調査結果（対象：平成7年度までに認定された148河川）を示し、ふるさとの川整備事業の現状を明かにする。

2. 調査結果

調査結果は項目毎にまず、明かになった事項について述べ、続いて個別のアンケート内容とその回答を示す。

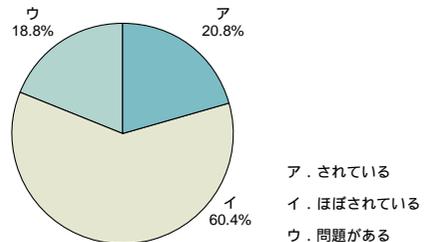
（各回答の中で、nは全回答数、Nは複数回答の場合の回答母数を示す。）

（1）維持管理について

維持管理については、供用を開始している河川の8割以上がほぼ意図したとおりに管理されている。また、地元住民の管理への参加は清掃作業等を依頼しているところが多く、地元団体と一体となり、イベント風の一斉清掃を実施するところが多い。今後の意向でも、維持管理の必要性を減らしたり、地元の河川であるという認識を高めるために清掃や草刈り程度の日常的な管理業務を地元が中心となった団体に依頼していこう、というところが多い。

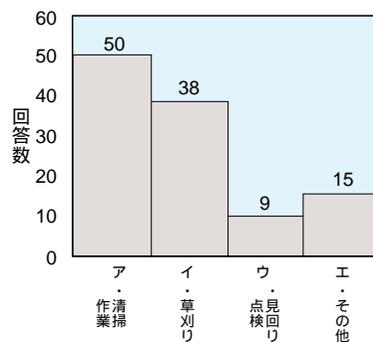
Q. 供用箇所は整備計画で意図した通りに空間管理がなされていますか。

n=95



Q. 維持管理作業における地元住民の協力の状況についてお答えください。（複数回答可）

n=112, N=76



Q. 維持管理に関して今後の構想や意向等があればお答えください。（記述式）

- ・隣接の桜づつみ事業と一体となった住民参加を予定（平常時維持）
- ・河道整備箇所については、高水敷をレキ質土に置き換えて、雑草が生えにくくするようにしたい。
- ・地元愛護団体との連携が図れるような組織作りが必要と思われる。
- ・地元住民に維持管理作業についての協力を依頼する。
- ・親水施設については、地域住民が利用しやすい環境作りをし使用頻度を高め、自分たちの庭の一部と考えてもらい、維持管理についても積極的に参加してもらいたい。
- ・維持管理の費用がかからない整備の検討
- ・地元の住民団体に全面委託したいと考えている。

など

(2) 利用状況、広報に関して

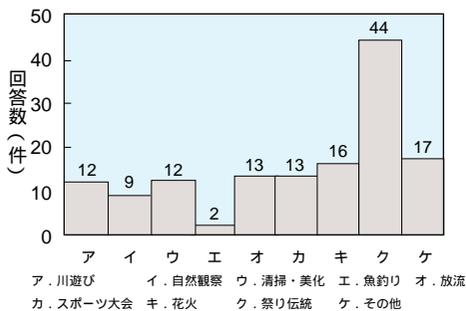
地元団体を主体として様々な種類のイベントを実施しており、規模は100～1,000人程度のものが最も多くなっている。

また、パンフレット等の広報活動を半分以上の河川で実施しており、事業理解に対する効果が大きいとされている。

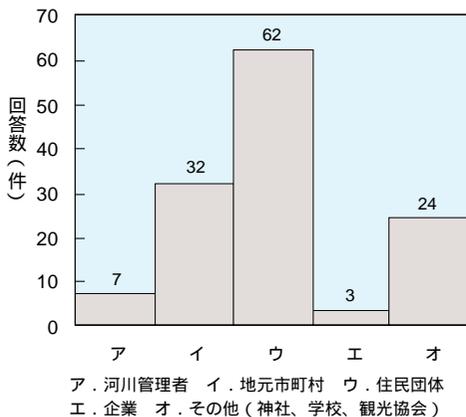
行政側が事業に対する目的・内容について積極的に地元働きかけており、地元も事業に対して理解を示している。広報活動が地域の川として活用されるための良好な手段であると思われる。

Q. イベントの内容、参加者数、等について選択してお答えください。(複数回答可)

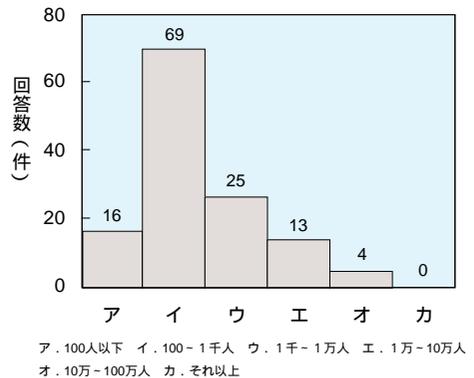
イベントの種類 (n=138, N=62)



イベントの主催者 (n=128, N=60)

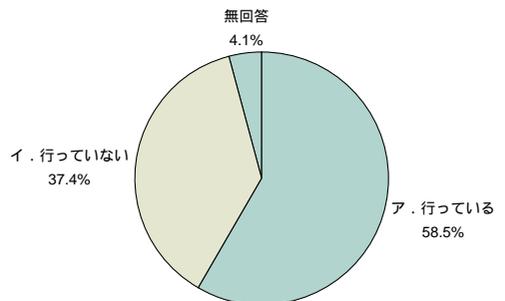


イベントの参加者数 (n=127, N=62)



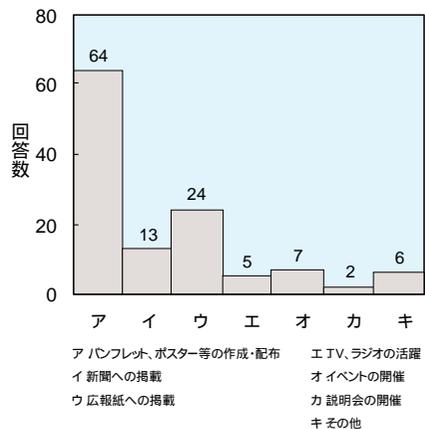
Q. ふるさとの川整備に対して広報を行っていますか。

n=146



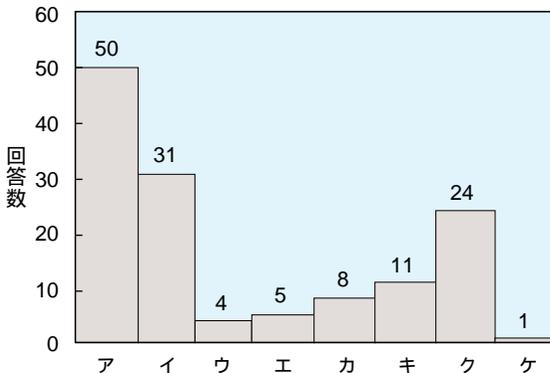
Q. 広報活動の内容についてお答えください。(複数回答可)

n=121, N=86



Q. 広報活動の効果についてお答えください。
(複数回答可)

n=135, N=80



- ア. 事業が広く知れ渡った
- イ. 事業に対する理解が広まった
- ウ. 利用者の増加が見込めた
- エ. きれいになった
- カ. 地元主体でイベントが開催されるようになった
- キ. 地元住民からの協力を得やすくなった
- ク. 河川環境に対する理解が広まった
- ケ. その他

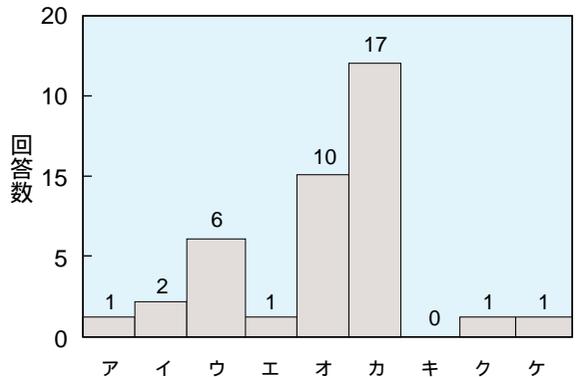
(3) フォローアップについて

フォローアップは事業に対する効果を把握し、必要な場合には改善を行っていくための調査等のことを示すが、フォローアップを実施しているところの多くは定期的な写真撮影や目視観測などの手軽に実施可能なものが多く、今後の予定でも同様になっている。

また、近年の環境問題に対する意識の高まりから環境を重視して調査を実施しようとする所が多い。

Q. どのようなフォローアップをしていますか。
(複数回答可)

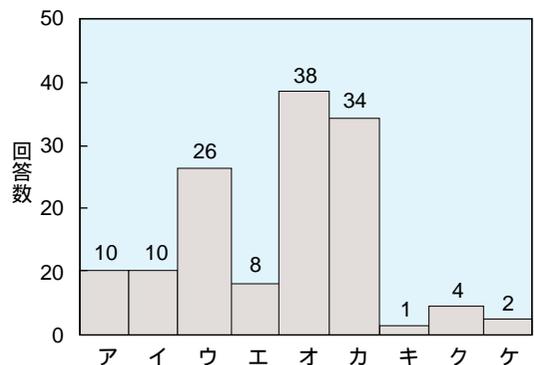
n=39, N=24



- ア. 利用実態調査
- イ. 住民へのアンケート調査
- ウ. 環境追跡調査
- エ. 地元団体等への聞き取り調査
- オ. 定期的な写真撮影
- カ. 定期的な目視による視察
- キ. 日誌等に記録
- ク. 住民との懇談会開催
- ケ. その他

Q. 今後、フォローアップを行う予定があればお答えください。(複数回答可)

n=133, N=66



- ア. 利用実態調査
- イ. 住民へのアンケート調査
- ウ. 環境追跡調査
- エ. 地元団体等への聞き取り調査
- オ. 定期的な写真撮影
- カ. 定期的な目視による視察
- キ. 日誌等に記録
- ク. 住民との懇談会開催
- ケ. その他

(4) その他

事業の円滑な推進や運営に対する今後の考え方として、住民の積極的な参加と流域一環となった取り組みに対して考えているところもある。

また、ふるさとの川整備事業を実施した上で様々な効果が報告されている。

その中でも、「川に接する機会が増えたり、水辺に憩いの場が創出できた」など、良好な親水空間としての効果が多い。

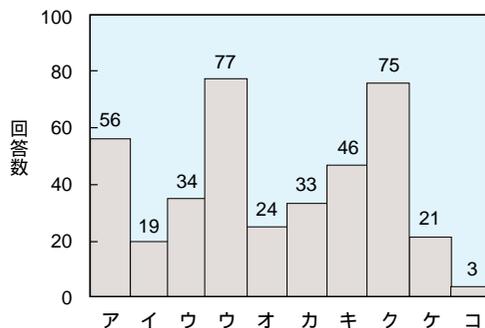
更に、本事業の目的の一つであるまちづくりとの一体性についても、「まちの魅力を向上させることができた」などが多く報告されている。

Q. 事業の円滑な推進や運営に際して今後の考え方や意向等があればお答えください。(記述式)

- ・委員会方式による行政間の調整や、地元要望の把握が必要である。
- ・事業内容が一般住民にもわかるように、マスメディア等を利用して広くPRする。
- ・実施計画段階で、市と住民代表との協議を行っており、地元の同意を得て事業を進めている。今後、自然環境や景観に優れた箇所について事業を実施する場合、学識者等のアドバイスも必要と考えている。
- ・現時点においては、スポット的なふるさとの川の整備計画を議論するのではなく、これらを含めた河川のあるべき姿、人々の親しめる川を基軸としたまちづくり等の広い範囲の論議を基調にして、その中での川の位置づけを明確にした上で、その事業を推進していく。これらの議論の中心部隊は、もちろん、広く住民に門戸を開いた住民参加の川づくりを基本姿勢とすることはいうまでもない。
- ・現在以上に地元(市、地権者、住民代表)との協議を密に行う。

Q. ふるさとの川整備を実施してよかったと思われる点があればお答えください。(複数回答可)

n=391, N=120



- ア. まちの魅力を向上させることができた
- イ. 地域の活性化につながった
- ウ. 自然環境の保全・向上が図れた
- エ. 住民が川に接する機会が増えた
- オ. ふるさとの川への意識啓発が図れた
- カ. 川に対する理解が広まった
- キ. 川が子供達に近い存在となった
- ク. 多様な人々の憩い・休息の場が創出できた
- ケ. 河川行政と地元市区町村との関係が強くなった
- コ. その他

3. おわりに

ふるさとの川整備事業が始まり10年以上が経過し、事業開始当初は親水、景観面に重点を置いた川づくりが行われてきたが、現在では自然環境、生態系保全に重点を置くようになってくるなど、地元住民のニーズも変化してきている。そこで、ふるさとの川整備事業に対しても、時代の変化に対応した計画づくりを行うために、今後ともこのような事業に関連する情報の収集を行い、積極的な情報公開・提供に努め、更に今後の計画づくりに反映し、これからのまちづくりと一体となった良好な水辺空間の形成に寄与していくことが必要であると思われる。